

## こよみ



2010年12月30日

コールセンターからの小さなよみもの



Vol.24

2010年  
総括

## 世界景気の大きな流れを掴んで、 2011年の投資に活かしませんか？



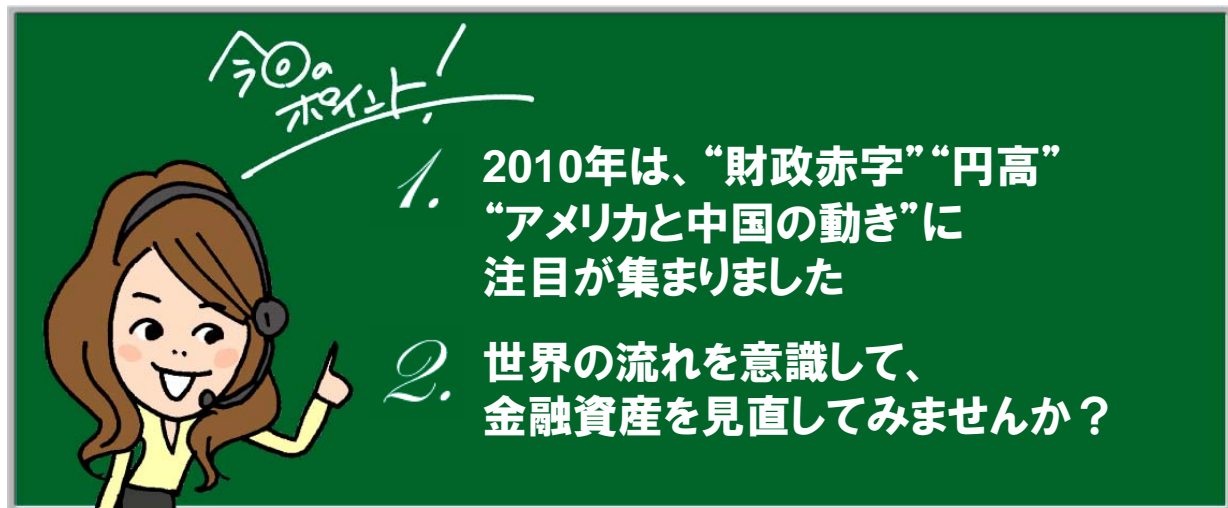
金融市場では、2010年も様々な出来事がありました。ファンドを用いた資産運用には長期で臨んでいただきたいと思います。1年を終えるにあたって、重要な出来事を大きな流れの中で振り返ってみることは意義があるでしょう。

そこで今回皆さまには、2011年の投資戦略を立てる上で、次の2点を押さえていただきたいと思います。

1. 2010年は、“財政赤字”“円高”“アメリカと中国の動き”に注目が集まりました
2. 世界の流れを意識して、金融資産を見直してみませんか？



コールセンターからの小さなよみもの



## 1. 2010年は、“財政赤字”“円高” “アメリカと中国の動き”に 注目が集まりました

2010年の金融市場は、リーマン・ショック後に各国が打ち出した経済対策が期限を迎え始めたこともあって、経済対策に頼らない「自力」での成長力が試された年でした。その中でも特に次の4点(①財政赤字、②円高、③アメリカの景気動向、④中国の政策)に注目が集まりました。

### ①財政赤字

春にギリシャで発覚した財政赤字問題が火種となり、南欧諸国に財政懸念が広がりました。EUなどによるギリシャ支援が決まり、EU地域全体の今後の備えとして7,500億ユーロ(1ユーロ=110円で換算すると82.5兆円)の枠組みが創設されたことなどにより市場は一旦落ち着きを取り戻しましたが、秋には再び、アイルランドなど財政赤字が多い国への不安が広がりました。その後アイルランドにも支援が決定したことで市場は落ち着きましたが、今後も財政赤字問題は、折に触れて市場を動かす材料となるかもしれません。



コールセンターからの小さなよみもの

6月 G20トロントサミット

11月 G20ソウルサミット

アジア株高

中国 インフレ懸念

ギリシャから始まる欧州財政不安、そして沈静化、再びアイルランドで

通貨安競争、新興国・通貨防衛

5月 上海万博開幕

9月 日本 為替介入

6月 サッカーW杯(南ア)

10月 ブラジル 金融取引税引上げ

11月 米・中間選挙

2010年

2011年

## ②円高

秋頃まで日本円は多くの通貨に対して円高方向に大きく動きました。それを受けて、9月に政府・日銀が6年半ぶり(前回2004年3月)の円売り・米ドル買いの為替介入を行ないましたが、それでも円高は収まらず、その後1995年4月につけた史上最高値79円75銭に15年ぶりに接近しました。その背景には各国の通貨安競争とも呼べる動きもありました。雇用回復が遅れ、国内消費需要が低迷していた先進国は、新興国などへの輸出で経済を支えるために、輸出競争力が増す自国通貨安を期待しました。実際にアメリカやヨーロッパなどでは自国通貨安を容認するような発言もあり、輸出企業の業績回復が図られました。アメリカではオバマ大統領が輸出倍増計画を打ち出し、ドイツはユーロ安によって輸出企業が活力を取り戻しました。

## ③アメリカの景気動向

世界経済をけん引するアメリカの景気動向には引き続き注目が集まりました。経済対策の目玉のひとつであった住宅ローン減税が春に期限を迎え、その後の住宅市場は伸び悩みました。また雇用環境が改善しない状況が続き、夏にはFRB議長がアメリカの経済情勢を「異例なほど不確か」とコメントするなど、アメリカの景気は厳しい状況が続きました。この状況を打破すべく、11月には市場に出回るお金の量を大幅に増やす思い切った金融緩和策がとられました。この金融緩和策により景気回復への期待が高まり、株式市場は上昇基調にあります\*。また景気回復を先取りしてか、長期金利も上昇しました\*。アメリカは2012年に大統領選挙が行なわれることもあり、2011年は景気・経済の立て直しの正念場といえそうです。

\*資料作成日時点



コールセンターからの小さなよみもの

#### ④中国の政策

今や世界経済の原動力ともいえる中国も、世界の関心を集めました。高成長が続く中国へ海外からの投資資金が流れ込み、不動産市場の過熱がみられました。そのような環境下、政府はバブルを抑えるために不動産向け融資の条件を厳しくしたり、政策金利に相当する基準金利を中央銀行が引き上げるなど、引き締め気味の政策に移りつつありますが、それらはいくまで中国経済の過熱感を抑えるためのものであって、必要なところにはお金を出す姿勢は維持するようです。中国政府は2010年の経済成長率を9.9%と予測し、2011年についても10%前後と高い成長が維持されると見込んでいます。中国が目標とする8%成長を死守する姿勢に変わりはないようです。

## 2. 世界の流れを意識して、 金融資産を見直してみませんか？

2010年10月に発表されたIMFの世界経済見通しでは、2011年の世界全体の成長率を4.2%（先進国2.2%、新興国6.4%）、そして2015年まで毎年4%を超える成長が見込まれています。この数字には、今後も世界経済が着実に成長していく力が感じられます。課題も残されてはいますが、2010年にアメリカなどでとられた金融緩和策が、やや停滞気味だった市場へのカンフル剤になったことは間違いありません。市場に出回るお金の量を増やす政策は、世界の投資家にリスクをとって投資しようと思わせるきっかけとなり、アメリカのみならず世界の株式市場の株価を下支えする材料となりました。結果、2010年の秋以降、世界の株式市場は上昇傾向となっています。出遅れていた日本の株式市場も秋口以降、強さを取り戻しつつあります。世界的な危機から、緩やかながらも一步一步進む世界景気の回復基調。もしかしたら、そろそろ「そろり」と株式にも目配りをしていく環境になりつつあるのかもしれない。

これらを踏まえて、2011年以降の投資戦略はどのように考えたらよいのでしょうか。短期的な市場変動に惑わされた不要な売買は避けてほしいのですが、数年単位で見た大きな流れを意識して、「一年の計」を立ててみるのもよいかもしれません。

最後に、2011年の干支「卯（兎・う）」の相場格言は、「跳ねる」です。これにあやかり、飛躍の年となることを願っています。

nikko am



コールセンター

0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00